

# JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

October 31, 2017 No.9

JACET 関東支部ニューズレター国際大会特集号 (WEB 版) 刊行に寄せて

— 「JACET 第 56 回 (2017 年度) 国際大会」開催のご報告と御礼—

支部長 木村松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB 版第 9 号) をお届け致します。関東支部ニューズレター委員会委員長の佐野富士子先生 (常葉大学) と副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学) を初めとする委員会の先生方のご尽力に衷心より御礼申し上げます。さて、JACET 第 56 回 (2017 年度) 国際大会は、「グローバル化が進む世界における英語—世界共通語の教育と研究における現状と課題を探る—」を大会テーマとして、8 月 29 日 (火) ~ 8 月 31 日 (木) の 3 日間、青山学院大学青山キャンパスにて、青山学院英語教育研究センター

共催、文部科学省、東京都教育委員会、青山学院大学後援により開催されました。本大会の参加人数は 1,000 人 (歴代 2 位) を数え、発表件数は 238 件に及びました。関東支部企画の特別講演「学習者としての主体形成を目指すアクティブラーニング」(溝上慎一氏: 京都大学) とシンポジウム「学習とは?」(溝上慎一氏: 京都大学、中野美知子氏: 早稲田大学、森田正康氏: ヒトメディア) は相互に連動し合い深い学びの場となりました。またエキシビションの英語落語 (桂かい枝師匠) は正しく大会テーマの ELF (English as a Lingua

## 目次

- ・ 巻頭言  
支部長 木村松雄 ..... -1-
- ・ 第 56 回国際大会報告  
国際大会組織委員会支部委員長  
高木亜希子 ..... -2-
- ・ 第 56 回国際大会支部企画報告  
国際大会組織委員会支部副委員長・エキシ  
ビジョン司会 ..... -3-
- ・ 第 56 回国際大会組織委員会支部報告  
国際大会組織委員会支部各部門責任者.... -5-
- ・ 第 1 回支部総会報告  
支部事務局幹事 高木亜希子 ..... -10-

- ・ 月例研究会報告  
月例研究委員会委員長 山本成代  
月例研究委員会副委員長 奥切恵  
月例研究委員会副委員長 辻りりこ..... -12-
- ・ 青山学院英語教育研究センター・JACET 関東  
支部共催講演会報告  
支部研究企画委員 飯田敦史  
支部研究企画委員 辻りりこ ..... -13-
- ・ 支部大会報告  
支部大会運営委員長 新井巧磨 ..... -15-
- ・ 支部紀要編集委員会からのお知らせ  
支部紀要編集委員長 伊東弥香 ..... -15-
- ・ 事務局だより  
支部事務局幹事 高木亜希子 ..... -16-

## 第 56 回 (2017 年度) 国際大会報告

### —大会を振り返って—

国際大会組織委員会支部委員長

高木亜希子 (青山学院大学)

Franca) を具現化した世界に通じる高次の話芸であり、「笑い」が万国共通のものであることを再認識させてくれる貴重な機会となりました。講師の先生方と桂かい枝師匠に御礼を申し上げます。

本大会は 1 年以上の準備期間を要し、前年度担当の北海道支部の経験をモデルとし JACET 本部との共同・連携の下、関東支部が一丸となることで実現が可能となった大会でした。大会運営の裏方に徹し、本大会を成功裏に導いて下さった、大会組織委員会支部委員長の高木亜希子先生 (青山学院大学)、副委員長の新井巧磨先生 (早稲田大学)、山口高領先生 (立教女学院短期大学) と各部門の責任者である以下の先生方を初めとする多くの先生方のご尽力に感謝し、改めて衷心より御礼申し上げる次第です。

[総務・広報]新井巧磨先生、[会場]山口高領先生、[ステージ・式典]奥切恵先生、[飲食]斎藤早苗先生、[アテンド・接遇]佐野富士子先生、[業者・展示]米山明日香先生、[受付]山本成代先生、[学生アルバイト統括]飯田敦史先生、[懇親会]菊池尚代先生、[会計]辻りこ先生、[国際大会組織委員会支部委員長]高木亜希子先生。

先生方、本当にお疲れ様でした。そして有難うございました。

最後になりますが、いつもお世話になっております賛助会員の皆様に改めて衷心より御礼を申し上げます。今後共 JACET 関東支部を宜しく御願ひ申し上げます。

JACET 第 56 回 (2017 年度) 国際大会は、「English in a Globalized World: Exploring Lingua Franca Research and Pedagogy (グローバル化が進む世界における英語—世界共通語の教育と研究における現状と課題を探る)」を大会テーマとして、8 月 29 日 (火) ~8 月 31 日 (木) に、青山学院大学青山キャンパスに於いて開催されました。支部企画特別講演として、溝上慎一先生 (京都大学) をお迎えし、「学習者としての主体形成を目指すアクティブラーニング」をテーマにお話しをしていただきました。本講演を踏まえて、支部企画シンポジウムでは、「学びとは何か」をテーマに、溝上慎一先生に加え、森田正康先生 (株式会社ヒトメディア代表取締役)、中野美知子先生 (早稲田大学名誉教授) にご登壇いただき、それぞれの立場から討論がされました。また、エキシビジョンでは、桂かい枝師匠を迎え、英語落語を披露していただきました。

今年度は、JACET 関東支部が国際大会の開催担当支部であり、私は国際大会組織委員会支部委員長を務めさせていただきました。国際大会組織委員会本部と連携しながら、国際大会組織委員会支部は実行チームとして、山口高領副委員長、新井巧磨副委員長を初め、総務・広報、会場、ステージ・式典、飲食、アテンド・接遇、受付、学生アルバイト統括、懇親会、会計の 10 部門 42 名の委員で構成され、約 1 年前から部門責任者を中心に準備が進められてきました。予想以上に様々な仕事があり、先生方には準備と運営に多くの時間を割いていただきましたが、大きなトラブルもなく、1,000 名の参加者を迎え、成功裏に大会を終了することができました。終始和やかな雰囲気、部門同士で連携し、準備と運営を円滑に進めるこ



とができたのは、先生方お一人おひとりのご尽力とこれまでの支部運営で培われてきた素晴らしいチームワークのおかげであると心より感謝申し上げます。



**第 56 回（2017 年度）国際大会  
支部企画報告（特別講演・シンポジウム・  
エキシビション）  
—大会を振り返って—  
国際大会組織委員会支部副委員長・  
エキシビション司会**

■ 関東支部企画特別講演報告 ■

国際大会組織委員会支部副委員長 新井巧磨  
(早稲田大学)

題目：「Active Learning Developing Learner

Autonomy：学習者としての主体形成を目指すアクティブラーニング」

講演者：溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

当日は朝からの雨にもかかわらず、会場には 90 名ほどの来場者がありました。その聴衆を前に、溝上先生はまずアクティブラーニング（以下、「AL」と表記）を導入したご自身の授業について写真を使って紹介するところからお話を始められました。200 名以上の大教室、100 名ほどの中規模クラス、そして 50 名以下の授業でのそれぞれの様子をお伝え頂き、工夫次第ではどのクラスサイズでも AL は導入できることをお示し下さいました。粘土細工による自己表現の授業など、先生ならではの特徴的な授業も行われていました。また、海外の大学でのグループワークの様子や日本の高校での実践風景などにも触れられました。

次に、先生は AL の定義に関して、中央教育審議会（2012/8/28）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—（答申）』を引用して紹介されました。特に、“認知的・倫理的・社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る”という部分を強調し、AL を通じて問題解決が出来た経験を積むことにより、単に学修のためだけでなく、社会でも通用する能力を涵養することに AL の意義があると述べられました。だからといって、全ての授業時間を AL にする必要はなく、教員・科目・習熟度・学年などの様々な要因を考慮に入れながら、従来の講義形式の授業に AL を組み込んだ「アクティブラーニング型授業」を実施していくのが理想的かつ現実的なのではないか、と提案されました。

AL では、「外化」すなわち、学習者が見聞きしたことを書いたり話したり発表したりする過程を通して、学習者自身の深い思考（論理的・創造

的・批判的思考、推論、判断、問題解決、意思決定などを促し、知識のネットワーク形成を図ることができるといった利点がある一方、AL型授業を効果的に実施する上では、いくつかのコツがあることにも触れられました。例えば、全体的な構成では、「個→協働→個」の枠組み、つまり活動前のインプットからグループワークやペアワークにつなげ、そして個別の振り返り作業を行うという流れが重要であること。乱数アプリ等を利用した席替えやグループ分けにより機会の平等さを保つこと。教員自身が授業に遅れることなく教室で準備を整えておき、学習者にルールとマナーを遵守させて雰囲気作りをしていくこと。このような大枠から細かなテクニックまでがAL型授業を実践していくには欠かせない要素となることが述べられました。

そして、AL型授業実施の試みは既に高校でも始まっており、溝上先生ご自身の実践について映像を交えてご紹介頂きました。最後に、ALを経験した高校生がこれからどんどん増えるため、それを受け入れる大学でもAL型授業を積極的に導入していく必要があると述べられました。

## ■シンポジウム報告■

国際組織委員会支部副委員長 山口高領  
(立教女学院短期大学)

題目：「学習とは？ (What is Learning?)」

パネリスト：溝上慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター)

パネリスト：中野美知子 (早稲田大学)

パネリスト：森田正康 (榊ヒトメディア)

司会：木村松雄 (青山学院大学)

国際大会最終日である8月31日に、関東支部企画特別講演に引き続き、関東支部企画シンポジウムが行われました。「学習とは？」というタイトルに対して、3名のパネリストがそれぞれの専

門性を基にご提案されました。最初に発表された溝上先生は、心理学の立場と優れた教育実践の紹介を基に、「外化なしの学習は思考力養成を放棄しているに等しい」といった提案をされました。中野先生は、これまでの大学における英語教育の研究・教育実践を背景に、「学生は、表現したいという欲求を持っている。表現したいという気持ちを壊さないことが英語教育で必要だ」と述べていたことが印象的でした。森田先生は、英語学習環境・サービスの提供といった背景を踏まえ、「インプットがあまりに多いこの世界において、個々の達成したい行動をその目標から逆算して、その人にあった学習方法を選べるようにするとよい」といった提案をされていました。このシンポジウムを通じて私が強く感じたのは、表面だけなぞったアクティブラーニング型授業をしないような工夫の必要性 (溝上先生)、学生が卒業後にも社会で活用できる英語教育の必要性 (中野先生)、学習者それぞれが持つ英語学習のニーズを提供することの必要性 (森田先生) でした。いずれの必要性も、教員があくまでファシリテーターとして、学習者それぞれの将来へ向けた学習がなされるべきだというメッセージに通じるものがあると感じました。



## ■エキシビション報告■

エキシビション司会 菊池尚代  
(青山学院大学)

「英語落語：桂かい枝師匠」(演目：「いらち俵  
(A Man In A Hurry)」「動物園 (The Zoo)」)

雷に打たれたような衝撃、とはこのようなことを指すのだろう。今年度の関東支部企画エキシビションは、落語界の第一人者、桂かい枝師匠の英語落語で、国際共通語としての「英語」を媒介に、国境を越えた笑いの渦に我々を巻き込んだ。木村松雄支部長が長い期間をかけご依頼申し上げ実現したのだが、それは想像を遥かに超えた熱気あふれるご公演だった。

400年も語り継がれた落語を英語にし、24カ国以上でご公演、2007年には文化庁から文化交流使にも任命された日本を代表する落語家、桂かい枝師匠は、エキシビションの当日、驕る様子もなくTシャツにチノパン姿でお越しになった。前日までヘルシンキ、コペンハーゲンと回られ、世界中の芸術家が集うデンマークでのアンデルセン・フェスティバルの招待公演を終え、ご帰国直後にもかかわらず、お疲れのご様子は一切ない。簡単に会場のお下見を済まされると、瞬時に照明や観客席のご指示を出された。「英語落語」という慣れない準備に、我々は緊張で張り詰めていた。

ご公演が始まると、一気に会場全体の雰囲気が一転、賑やかな笑い声が何度も木霊した。海外からお見えになった先生方も、みな一様に楽しんでいらっしやる。英語を媒介に日本の伝統文化の神髄を、会場一体となって垣間見ていただけたことに胸が熱くなった。笑いは文化的な共通認識が必要であり、共通言語をもってしても理解は難しいのでは、との疑心を簡単に一蹴、その魅力と深さに引き込まれた。桂かい枝師匠の英語落語は、今回の国際大会のテーマである「グローバル化が進む英語」に相応しい企画になったと思う。このご

公演をご快諾くださった桂かい枝師匠には、心から御礼申し上げますと共に、今後も世界と日本を結ぶ懸け橋としてのご活躍を切にお祈りしたい。さらに、この企画を陰で支えてくださった先生方、スタジオ調整室のスタッフの皆様のご尽力なくしては成り立たなかった。この場を借りて、感謝の気持ちを残したい。

## JACET 第56回 (2017年度) 国際大会 組織委員会支部報告 —大会を振り返って— 国際大会組織委員会支部各部門責任者

### ■総務・広報部門■

責任者 新井巧磨 (早稲田大学)

総務・広報部門の主な業務は次の7つでした：  
「掲示物関係全般」「ポスターパネルレンタル」「立看板作成」「ランチマップ作成」「VIP用観光案内(英語版)の準備」「英語版ゲスト用無線LAN利用方法簡易マニュアルの作成」「打ち上げの手配」。これらに加え、大会当日は他部門の応援にいくことも多くありました。

当部門では、特に鈴木健太郎先生と多田豪先生のご活躍が目覚ましく、御二方のおかげで滞りなく業務の遂行ができました。具体的には、鈴木先生に「立看板の作成」「VIP用観光案内(英語版)の準備」を、多田先生に「ポスターパネルレンタル」「打ち上げの手配」をご担当頂きました。立看板で皆様をお迎えし、打ち上げで委員を送り出すという、今大会の開始から終了までの節目をお二人の先生にお世話になりました。他にも、掲示物の貼り付けに他部門の応援に、関係各所で大活躍して頂きました。鈴木先生と多田先生なくして本大会は成り立ちませんでした。ここに篤く御礼申し上げます。

また、笹島茂先生には、掲示物各種の印刷、「英

語版ゲスト用無線 LAN 利用方法簡易マニュアルの作成」、そして当部門の業務全般に関するアドバイザーをお願い致しました。先生の後ろ盾があったからこそ、我々も安心して作業に取り組むことができました。感謝の念に堪えません。

一方、責任者の新井は組織委員会支部副委員長も兼務しており、大会期間中はほとんど大会本部に詰めて、掲示物の追加作成や委員長の補佐を担当しておりました。総務と副委員長という両方の立場から、大会全体を俯瞰することができました。この経験を次回の支部大会へ活かし、大会運営の効率化、大会そのものの活性化につなげることも、関東支部大会運営委員長としての任務の一つと心得ております。

総務・広報部門の業務遂行にあたっては、本部委員の先生方はもちろんのこと、支部委員長の高木亜希子先生、副委員長の山口高領先生、各部門責任者の先生方にも多くのご助言とご助力を賜りました。心より感謝申し上げます。

## ■会場部門■

責任者 山口高領（立教女学院短期大学）

会場部門の主な業務は、大会の記録と、発表会場の機器使用を円滑に進めることでした。大会の記録には、青山学院大学の小張敬之先生にご尽力頂きました。発表会場は、本多国際会議場と、その他の会場に分かれており、会議場では、奥切恵先生・長田恵理先生・武田礼子先生に、緻密なステージ進行表を作って頂けたおかげで大きなトラブルもなく進行できました。その他の発表会場では、アルバイト学生に機器使用・トラブル対処法を学んでもらい、会場係の他の先生の監督によって、機器の接続トラブルにも対処できました。アルバイト学生の統括は、飯田敦史先生が、アルバイト学生を時間帯ごとに割り当てて極めて効率のよい指導をされていたのも、今回の大会の成功に欠かせない要因だと考えています。

一方、会場責任者の山口は、組織委員会支部副委員長として、支部委員長の高木亜希子先生、副支部委員長の新井巧磨先生のサポートをしました。特に、本部委員の先生とのパイプ役を私は務めました。国際大会準備・開催期間中における作業は、支部委員会の実働なくして成り立ちませんが、国際大会 1 年前には開始している本部委員の先生方による企画立案・文書作成・情報の周知といった重要な作業あつてのことだと、国際大会が終わった今、痛感しています。今回、大きなトラブルもなく、国際大会が開催できた点を分析し、次の国際大会開催へと伝えて参りたいと考えております。

## ■ステージ・式典部門■

責任者 奥切恵（聖心女子大学）

国際大会でステージ部門が担当したのは、メイン会場となる本多記念国際会議場での開閉会式、JACET 賞授賞式、基調講演、シンポジウムでした。参加者の皆様に JACET の活動を知っていただき、英語教育についての知識共有を楽しんでいただけるよう、できる限りスムーズな進行に向けて何ヶ月も前から準備いたしました。

基調講演では 1 日目に Dr. Barbara Seidlhofer をお迎えし、その後シンポジウムでは Prof. Nobuyuki Hino、Dr. Henry Widdowson、Prof. Kumiko Murata にも加わって頂き活発な議論が交わされました。また同日に、Dr. Widdowson のご厚意でミニ講演も実施されました。2 日目には Dr. Phyllis Ghim Lian Chew が基調講演、その後 Dr. Chew、Prof. Joo-Kyung Park、Prof. Masaki Oda のシンポジウムも大盛況でした。3 日目には関東支部企画特別講演で Dr. Shinichi Mizokami の講演と Mr. Masayasu Morita、Dr. Michiko Nakano、Prof. Matsuo Kimura が「学習とは？」という英語教育の根底に迫り盛り上がりました。3 日間に渡って、多岐にわたる分野・

視点からの豪華ゲストを迎えることができ、たくさんの方々の JACET 会員の方々にご出席いただき、本当にありがとうございました。さらに 2 日目の夕方には、桂かい枝師匠をお招きし、各国の参加者を聴衆に英語落語で会場全体が笑いに包まれました。

全体的に、JACET 本部との連携を取りながら滞りなく実施することができ、青山学院大学のお手伝いの学生も大変協力的で、何よりも多くの JACET 会員の参加のおかげで、メイン会場での催しを賑やかに進めることができました。さらに例年に増して今年は *Lingua Franca* 英語での講演や発表も増え、英語教育に興味のある人なら誰でも参加できるようになってきました。これからの JACET 国際大会が益々活発になることをお祈りいたします。

## ■ 飲食部門 ■

責任者 齋藤早苗（東海大学）

「わ～、見て」という学生スタッフの声が耳に入った一時は、まさに飲食という責務の一端を担うことの大切さを実感した瞬間でした。飲食、特にお弁当について皆様のいろいろな声は今でも脳裏に焼きついています。飲食担当の役割を賜り、真に心を集中して食について心算し、普段ではなかなか出逢うことがない新たな学びの喜びを得ることができました。特に 3 点、「時」を巡りながらここに記したいと思います。

一つ目に、飲食担当としての役割に対する意識です。第一に、検討、そして準備を重ねていく毎に、先生方やアルバイトスタッフの方たちの手元に届くお弁当が幸せな気持ちを満たしてくれればという一心が検討、そして準備を重ねていく毎に募っていったことです。この思いができる限り多くの方に伝わりますようにと願い、お弁当やリフレッシュメント、そして飲み物の内容について試行錯誤し、業務に努めました。今、ここに振り

返ってみると、いわば「十人十舌」があり、甘党、辛党、濃い口、薄口、お肉党、あるいはお魚党、大食の人、小食の人など、それぞれの「口福」を分かち合う一時があったのではないのでしょうか。

二つ目は、飲食部門のパートナーである川口恵子先生をはじめ、他部門の委員の先生方との連携の大切さを痛感したことです。特に、たくさんの方々の時間を一緒に費やしてくださったパートナーの川口先生との出逢いが感慨深い一時として心に深く刻みこまれています。もし、お弁当数が足りなくなったら、制限付きのお弁当を含め、現場で直面する諸問題の解決と対応について一緒に考え、行動してくださったパートナーである川口先生の存在は大きいものでした。準備期間から大会日まで共に考え、行動し、また、耳を傾けてくださった川口先生との出逢いに対する感謝の気持ちでいっぱいです。一方で、VIPs、エキシビジョン、学生スタッフをはじめ、他部門の委員の諸先生方と一丸となって切磋琢磨してきたことの尊さを深く感じました。現場にいざ立ち、予想外の問題に直面した時、正確な判断と行動が求められます。そのような状況に直面した時こそ、部門を越えた密な連携がとれていなければ確実に、かつ敏速な運営を施すことの難しさをも再認識することができました。

三つ目は、この国際大会を通して、国境を、そして文化を越え、異なる食材への好みや関心を持つ人が集まり、同じ食を囲み、一緒に味わう感覚を蟠りなく共有できるひと時があったことです。

総じて、国際大会開催にあたり、VIPs をはじめ、大会運営に携わる方々のお腹を満たし、和やかな気持ちを共有できるひと時をつくり、会話をもふくらましてくれる小さな箱に詰められたお弁当は忘れ難い存在です。そして、次の仕事へのステップへつなげる原動力になり得る貴重なお弁当の存在の重み（量的に軽かったかもしれません）を感じています。

最後に、今一度、二人三脚のように、飲食担当

のパートナーとなって邁進して下さった川口恵子先生に対する深謝の意をここに表したい次第です。親身に問題に対応して下さったり、一緒に食探しに歩いて下さったように、先生が示して下さったパートナーシップがあったからこそ、飲食担当ペアが成り立ったのだと改めて深謝いたします。

結びに、ご指導、ご指示、アドバイス、お弁当についてのコメントを賜りました本部・支部委員の諸先生方にこの場を借りまして幾重にも感謝申し上げます。

#### ■アテンド・接客部門■

責任者 佐野富士子（常葉大学）

今年の国際大会のVIPは総勢20名でしたが、前日の空港でのお出迎えと宿泊先へのご同行から始まり、大会期間中のVIPルームでのおもてなしと会場へのご案内を無事に終了することができました。特に、VIPルームをご利用の先生方にはお弁当とお飲み物でのおもてなしを喜んでいただけましたし、ある食材を除くメニューをご希望の先生にも間違いなくご用意できました。これは一重に、お弁当飲み物部門の斎藤早苗先生、川口恵子先生のご尽力、及び、VIPアテンド部門の河内山晶子先生、佐竹由帆先生、VIPルーム担当の木村ゼミの院生さんの細やかなご配慮、機敏なご対応、温かいおもてなしによるところが大きく、改めて感謝申し上げます。お弁当飲み物部門の斎藤早苗先生、川口恵子先生のメニューのチョイスが素晴らしく、毎日異なったメニューのお弁当でおもてなしすることができました。美味しいお弁当にお茶もついていたので、私共の仕事の軽減にもつながりました。また、学術交流委員会、ステージ部門、昨年度（北海道大会）のVIPアテンド部門とのスムーズな連携がありました。VIPルームの手が足りない時間帯には大会本部から援助要員を派遣して頂き、皆々様にご支援・ご協力を

いただきました。本当にありがとうございました。今後もJACET国際大会が発展することをお祈り申し上げます。

#### ■業者展示部門■

責任者 米山明日香（青山学院大学）

今回の第56回国際大会においては、出版社やメディアなど、さまざまな業種の46社が展示をし、65ブースを用意しました。全体としては、多くの参加者が展示ブースを訪れ、盛況のうちに幕を閉じるに至りました。

展示は会場校（青山学院大学）7号館の3階から5階までの建物両側と中央の3か所となりましたが、建物の構造上、展示ブースに参加者が訪れづらい箇所での展示もあったことが初日には見受けられました。そこで、業者と担当者がともに工夫をし、なるべく多くの参加者の目に留まるように、移動式ホワイトボードを使って業者展示があることを記したり、テープで矢印を作ってそれを廊下に貼ったりするなど趣向を凝らしたため、徐々に展示ブースを訪れる方々が増えました。加えて、連日、担当者になるべく多くのブースの様子伺いに出向いたり、業者の方々にお声がけを行ったりするなど業者との連携を高めるように努めました。こうした工夫の結果、業者の方々から、最終日に多くの好意的なお言葉をかけていただけ、安堵して大会を終えることができました。

このように本部門の責任を果たすことができたのも、本部門のご担当の東洋英和女学院大学の笹島茂先生、武藤克彦先生の細やかなお心配りとお働きのおかげです。また、会場校のアルバイト学生も、机やさまざまな資材の運搬を自主的に行ってくれたり、展示ブースの見回り、頻繁なごみ拾い・片づけ、机の配置など、肉体的にもきつい仕事を夏の暑さの中、積極的に行ってくれたり、本当によく働いてくれたことに感謝の念は尽きません。大会前後の業者展示用の荷物搬入におい



でも、滞りなく行うことができたのは、本部スタッフ、運送会社スタッフ、開催校職員の尽力のおかげです。

今回、業者展示部門がその責務を果たすことができたのは、上記の多くの方々のご努力の結果と言えます。この場をお借りして、すべての方々に御礼申し上げますとともに、業者展示部門からの報告とさせていただきます。

## ■受付部門■

責任者 山本成代（創価女子短期大学）

受付責任者の大役をお引き受けした時に、東京での国際大会ということで、おそらく大変多くの方が参加されるだろうということが頭をよぎりました。自分がこれまで参加した数々の学会の全国大会でも、受付の印象が大きかったことを認識しています。そういったことを考えると、来て下さる方に、最初からご不便をかけずに大会に参加していただけるよう、気を配っていくことを常に念頭に入れて行動していかなければならないと思っていました。今回、国際大会ということではありましたが、受付に割り当てられた先生方の人数は限られており、5名でいかに効率よく受付の作業を行っていかれるか頭を悩ませたことも事実です。しかし、受付についてくださったアルバイト学生の方々が、実によく動いてくださり、また、煩雑な受付業務もすぐに覚えてくださったので、初日から滞りなく受付を稼働させることができました。先生方と学生の方々の息の合った協同作業で受付が円滑に回ったといっても過言ではありません。受付の配置から、当日の作業にいたるまで、各先生方の献身的な行動には本当に感謝いたします。特に、初日は息をつく暇もなくいらっしやる来場者の対応で、水分補給もままならなかった時間帯もありました。大会参加者が1,000名という数字をお聞きして、当日の忙しさが納得できました。その人数にもかかわらず、スムーズ

に来場者をさばくことができたのは、先生方と学生の方々とのチームワークの賜物と言えると思います。

今回の国際大会開催にあたって、組織委員会では何回もの準備委員会を開き、様々な分野で意見交換してきました。準備段階では、昨年度の反省も踏まえて、「受付での質問対応マニュアル」なども作成しました。個人的には、このマニュアルを作成することにより、大会全体の流れが見えてきてよかったと思っています。実際、受付が稼働してみると、このマニュアルになかったような質問事項も多く聞かれ、対応に追われたこともありましたが、組織委員会の皆様の連携により対処することができました。今回、1,000名という来場者がありながら、大きなミスもなく3日間の受付作業を終えられたことは、受付の先生方やアルバイト学生の方々と並びに委員の皆様ののおかげだと痛感しております。この場をお借りして心からお礼申し上げます。

## ■学生アルバイト統括部門■

責任者 飯田敦史（群馬大学）

今回のJACET国際大会には、青山学院大学の学生スタッフ37名と一緒に参加しました。今回の学生スタッフは、青山・相模原両キャンパスから選ばれ、所属する学部も異なり、学年も1年生から大学院生までと様々でした。この状況における私の役割は、この37名の学生をまとめ上げ、「一体感」を生み出すことで、大会を成功に導くことでした。様々な事態を想定し、他部門の責任者と連携を図りながら国際大会に臨みましたが、いざ大会がはじまると予期せぬことが次々と起こり、責任者である私の判断が遅れてしまうことも多々ありました。そのような状況においても、37名の学生は常に的確な判断をし、冷静に対応してくれました。日に日に、学生同士も仲良くなり、一人ひとりが自覚と責任を感じながら仕事に取

り組む中で、自然とこの「一体感」が生まれたのだと思います。

今回の国際大会では、アルバイト統括部門の伊東弥香先生、今井光子先生にもたくさんのご助言・ご支援をいただきました。ありがとうございました。私1人では、この37名の学生スタッフをまとめ上げることはできなかつたと思います。そして、何より、どんなに疲れていても笑顔を絶やさず、嫌な顔一つせずに4日間業務を遂行してくれた学生スタッフに、心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。青山学院大学の卒業生として、第56回JACET国際大会の運営に携われたことは私にとって本当に貴重な経験になりました。有能な支部委員の先生方に支えられ、また優秀な青山の先輩、信頼のおける後輩と一緒に仕事ができ本当に幸せな4日間でした。



## 第1回支部総会報告

支部事務局幹事

高木亜希子（青山学院大学）

2017年6月10日（土）に、青山学院大学14号館第18会議室に於いて、2017年度第1回支部総会が開催されました。支部総会では、2016年度事業報告・会計報告、2017年度事業計画についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。なお、会計報告は省略します。

## ■2016年度事業報告■

### I. 大会、セミナー等の開催（1号事業）

#### (1) 支部大会の開催

名称：2016年度関東支部大会

日時：平成28（2016）年7月3日（日）

場所：早稲田大学早稲田キャンパス

規模：約335名

#### (2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET  
関東支部共催講演会

場所：青山学院大学

規模：毎回約30名

日時と内容：

平成28年4月9日（土）山内豊（東京国際大学）  
「教科書のデジタル化の今後：その可能性と課題」

平成28年9月10日（土）浅岡千利世（獨協大学）  
「理論と実践の間で—英語教職課程履修学生の体験と省察の往還を通して見えてきたこと」

平成28年10月8日（土）小田眞幸（玉川大学）  
「大学英語教育のグローカライゼーション--ELFプログラムの挑戦--」

平成28年12月19日（土）菊地恵太（神奈川大学）  
「言語学習におけるモチベーション理論：現場に何が生かせるか」

平成29年1月21日（土）米山明日香（青山学院大学）  
「効果的な音声教育：発音指導からスピーチ指導まで」

#### (3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

場所：青山学院大学

規模：毎回約30名

日時と内容：

平成28年5月14日（土）岡秀夫（元目白大学教授、東京大学名誉教授）  
「英語教育学研究—残された課題」

平成28年6月11日（土）大井恭子（清泉女子大学）  
「中・高・大をつなぐ『思考力・判断力・表

現力』を育むライティング指導」

平成 28 年 11 月 12 日（土）鳥飼玖美子（立教大学  
名誉教授）「＜グローバル人材育成＞政策が英語教育  
にもたらすもの」

Ⅱ. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の  
刊行（2 号事業）

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 4 号（英語名：  
*JACET-KANTO Journal*）

日時：平成 29（2017）年 3 月 31 日

規模：約 1100 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 7・8 号

日時：①平成 28（2016）年 9 月 30 日

②平成 29（2017）年 3 月 31 日

※JACET 関東支部ホームページに pdf で掲載

Ⅲ. その他（5 号事業）

(1) 支部総会の開催

名称：2016 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 28（2016）年 7 月 3 日

②平成 28（2016）年 11 月 12 日

場所：早稲田大学・青山学院大学

目的：①2015 年度の支部の事業報告、会計報告  
2016 年度の支部の事業計画

②2017 年度の支部の事業計画、予算案お  
よび人事案の審議

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 28 年 4 月 9 日、5 月 14 日、6 月 11  
日、7 月 2 日、9 月 10 日、10 月 8 日、11  
月 12 日、12 月 19 日、平成 29 年 1 月 21  
日

場所：青山学院大学・早稲田大学

## ■2017 年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催（1 号事業）

(1) 支部大会の開催

2017 年度は、関東支部担当で国際大会開催のため、

支部大会は実施せず。

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET  
関東支部共催講演会

日時：平成 29（2017）年 4 月、9 月、10 月、12  
月、平成 30（2018）年 1 月の 5 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の  
研究者達による、最新の研究成果や知見を発表  
する講演会を定期的実施する。

- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界  
で英語コミュニケーションに携わっている専  
門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 50 名

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

日時：平成 29（2017）年 5 月、6 月、11 月の 3  
回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の  
研究者達による、最新の研究成果や知見を発表  
する講演会を定期的実施する。

- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界  
で英語コミュニケーションに携わっている専  
門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 50 名

Ⅱ. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の  
刊行（2 号事業）

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 5 号（英語名：  
*JACET-KANTO Journal*）

日時：平成 30（2018）年 3 月 31 日

規模：約 1100 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 9・10  
号

日時：①平成 29（2017）年 10 月 31 日

②平成 30 (2018) 年 3 月 31 日

目的：支部活動の動向や支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行う。

※JACET 関東支部ホームページ、pdf で掲載

### Ⅲ. その他 (5 号事業)

#### (1) 支部総会の開催

名称：2017 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 29 (2017) 年 6 月 10 日

②平成 29 (2017) 年 11 月 11 日

場所：青山学院大学

目的：①2016 年度の関東支部の活動、会計報告、および 2017 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案を示す。社員選挙についての説明を行う。

②2018 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案の審議・承認を行う。

#### (2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 29 (2017) 年 4 月、5 月、6 月、9 月、10 月、11 月、12 月、平成 30 (2018) 年 1 月、3 月

場所：青山学院大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案を行う。

とも内容の濃い充実したものだった。柴田先生のご発表は、ご自身のご経歴やラジオ番組のお話など大変わかりやすいものだった。田中先生のご発表には 50 名以上の参加者があり、ご発表後も多くの質問が会場から出され熱を帯びたものとなった。多くの方のご参加と様々なお質問から、会員の方々の熱意が感じられた。各先生方のご発表内容に関しては、後述の月例研究会報告詳細を参照。

#### ■2017 年度下半期活動計画■

2017 年度下半期は、11 月 11 日 (土) に小林めぐみ先生 (成蹊大学教授) をお招きして、「映画を通して学ぶ World Englishes」という題目でご発表をお願いする。青山学院大学にて 16:00~17:20 開催予定。

山本成代 (創価女子短期大学)

#### ■月例研究会 5 月報告■

日時：2017 年 5 月 13 日 (土) 16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル (14 号館) 9 階第 16 会議室

題目：「英語運用力向上の秘訣ービジネスコミュニケーションの視点からー」

講師：柴田真一 (目白大学)

#### 月例研究会報告

月例研究委員会委員長

山本成代 (創価女子短期大学)

月例研究委員会副委員長

奥切恵 (聖心女子大学)

辻るりこ (神田外語大学)

#### ■2017 年度上半期活動報告■

2017 年度上半期は、5 月、6 月の 2 回にわたって月例研究会を開催した。5 月 13 日に柴田真一先生 (目白大学教授)、6 月 10 日に田中茂範先生 (慶應義塾大学教授) をお招きした。両先生のご発表

本講演では、現代のグローバル社会の中で必要とされる英語コミュニケーション力について、ビジネスコミュニケーションの具体例を通じて語られた。最初に現場で必要とされるビジネス英語と日本における英語教育の共通点が説明された。一つは、ビジネスパーソンに求められる資質は人間性が大きく影響するが、それは同時にビジネスに限らず英語教育において大切なものであり、社会文化の習得にも通ずるものがあることが説明された。politeness もこの一例であり、ビジネスに限らずどの分野の英語学習者にとっても必要なコミュニケーションスキルである。さらに英語

力においては、3C (Clear, Concise, and Constructive) が英語運用力の秘訣として実例を挙げながら説明され、聴衆もビジネス英語が特殊なものではなく、英語教育全般に必要、かつ英語学習の極意でもあることを実感できた。

教育法においては、まず reading で例文を読みインプットし、その中から使える文章を抽出して writing や speaking としてアウトプットする練習をするという方法が大変効果的であり、その実例として企業研修や大学の授業での多くの事例が紹介された。柴田氏が携わっている NHK の英語教育番組の中でもエッセンスとなっているが、シンプルな世界標準の英語を使用し、3C のスキルを身につけ、インプットからアウトプットをすることを意識することが英語運用力向上に寄与することが報告された。多くの実例や裏話などにも触れることができ、聴衆からも活発に質問や意見が出て、大変興味深い研究会となった。

(奥切恵・聖心女子大学)

## ■月例研究会 6月報告■

日時：2017年6月10日(土) 16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル(14号館)10階第18会議室

題目：「英語教育の条件：Authenticity, meaningfulness, and personalization」

講師：田中 茂範(慶應義塾大学)

本講演ではまず、英語教育の条件：(1) Language Exposure の質と量、(2) Language Use の質と量 (3) Urgent Need の存在、という各条件についての概説を述べて頂いた。田中先生によると、質という部分における英語教育の条件というのは、教材や活動が authentic で meaningful で且つ personal なものでなくてはならないことが指摘された。この指摘の中で、authenticity (真正性) には、言語材料・言語活

動の真正性があり、さらに学習者がその教材や活動を真正性があると解釈するかという3つの種類の真正性が存在するとのことである。さらに meaningfulness については、英語学習においての「意味がある」ということと教育においてと二つの側面からお話頂いた。その際、大切なのは、目的の伴った「意味づけ」であり、教師の説明力と既知の情報との関連づけを含む知識のリソース化が重要であると示唆された。加えて、英語に触れることを日常的に行うことや日常に溢れていることを英語化することで、My English という自身の考えを表現する personal な英語を構築していくことが必要であるとのことである。

以上のような条件を満たす英語教育法とは CLT (Communicative Language Teaching) であるということが明示された後、CLT の理論的背景から CLT の実践まで説明頂いた。その CLT の実践の中で、CBI (Content-Based Instruction) や TBI (Translation-Based Instruction) に触れながら SFC Project English の実践報告をして頂いた。また、中高生対象の場合、カリキュラムの中に TBI を入れていくことが可能ではないかということで実際に、場面に応じて「私」の役割が変わるということについて I am の具体例が示された。最後に、CEFR に基づいた CAN-DO リストの有用性を高める為に、どう CAN-DO を評価するのか、学習・指導のポイントを併記することが大切であると指摘された。また同時に CAN-SAY の記述(どういう言語・情報内容を含むのか)を含んだものを作成し、タスク分析、評価することも必要ということが最後に提示された。短い時間ではあったが、改めて英語教育の条件について再考の重要性を認識する貴重な時間となった。

(辻りこ・神田外語大学)

## 青山学院英語教育研究センター・JACET

### 関東支部共催講演会報告

支部研究企画委員

飯田敦史（群馬大学）

支部研究企画委員

辻りこ（神田外語大学）

#### ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第1回）報告■

日時：2017年4月8日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）9階第16会議室

題目：「英語教育研究における混合研究法の可能性」

講師：抱井尚子（青山学院大学）

本講演では、社会（人文）科学の分野において比較的新しい研究手法である混合研究法（Mixed Methods Research: MMR）に関する主要概念が取り上げられ、この手法の特徴、研究実施上の不可欠な要素、研究手順・論文作成の3点に焦点を絞って解説がなされた。

社会科学の分野における混合研究法は、単一の研究プロジェクトにおいて量的、質的データの両方を扱うものである。特に、質的・量的アプローチを組み合わせることで、どちらか一方の研究アプローチを使用した時よりも研究課題に関してより良い理解が得られるものである。しかし、混合研究法は、単なる質と量の「併用」ではなく、核となる「統合」が不可欠となる。つまり、私たちがこの研究法を使用する時には、質と量の「統合」によるシナジーの知を示すことが大切である。

混合研究法を実施する上で必要な3つの要素は「研究目的」、「デザイン」、「統合方法」である。研究目的が決まれば、研究デザインが決まり、そして研究でデザインが決まれば、統合方法が決まってくる。本講演では、混合研究法の5つの目的

（トライアングレーション、補完、発展、始まり、拡張）、6つの研究デザイン類型（収斂デザイン、説明的順次デザイン、探索的順次デザイン、介入研究デザイン、社会的公正デザイン、多段階評価研究デザイン）、4つの統合類型（データの結合、データの説明、データの積み上げ、データの埋め込み）及び、サンプリング方法（同一、平行、埋め込み、マルチレベル）が具体例とともに詳細に取り上げられた。

また、本講演では、混合型研究の実施手順にも触れられ、最終的にはどのように論文としてまとめることができるのか説明がなされた。論文の構造は、基本的には一般的な実証研究論文と共通する部分が多いが、以下の3点を明記する必要がある。1点目は、論文の読み手に対して混合研究法とは何かを説明すること、2点目は、方法論で、研究手続きのダイアグラムを（あるいは時間軸をダイアグラムで）提示すること、3点目は、統合された結果を提示する際、質的・量的データを同時に提示するジョイントディスプレイを積極的に利用し、シナジーの知を明確に示すことである。こうすることで、混合研究法によってどのようなシナジー効果があったのかを示すことが可能となる。

近年、英語教育の分野においても、混合研究法は注目を浴びており、今後ますます混合型研究が増えることが予想される。実証研究においては、目的に応じて手法は変わっていくものだが、混合研究法を積極的に用いることで、より緻密に物事の事象を見ることができのかもしれない。本講演では、混合型研究論文を学術誌に投稿する際の留意点、あるいは知の在り方に関する質問が聴衆から挙がり、混合研究法の関心の高さが伺えた。

最後に、MMR コミュニティでは近年、混合研究法を用いる目的としてトライアングレーション（Triangulation）を掲げることに對し、慎重な姿勢を見せているとのことである（詳細は、下記の文献を参照）。これは、「トライアングレー

ション」の概念自体が非常に曖昧である上、その用語に「異なるデータの分析結果の収斂を善しとする」意味合いが含まれるためである。そのため、MMR コミュニティでは、量的・質的データ分析結果の比較検討を目的として混合型研究を実施する際は、トライアングレーションではなく、異なるタイプのデータを補完的に使用しながら現象の多面性・複雑性を解明するといった目的を立てることを強く推奨している。英語教育の実証研究においても、トライアングレーションは幅広く使われているが、今後はこの点に注意しながら混合型研究を実施していくことが大切である。  
<参考文献>

Fetters, M. D., & Molina-Azorin, J. F. (2017). The journal of mixed methods research starts a new decade: Principles for bringing in the new and divesting of the old language of the field. *Journal of Mixed Methods Research*, 11(1) 3–10.

(飯田敦史・群馬大学)

## ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第2回）報告■

日時：2017年9月9日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学 11号館 4階 1143教室

題目：「英語を媒介とした大学授業の課題と展望」

講師：菊池尚代（青山学院大学）

現在、私たちは英語教育を取り巻く言語使用の状況や、学習者のおかれている学習者環境において大きな変化の時期を迎えている。本講演ではこうしたことを踏まえ、大学入学希望者や学生の多様性が指摘された。その背景には国際バカロレア（IB）の普及もあり、IBを受けてきた大学入学希望者がいることや、帰国子女の増加、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の取り組み、そして留学生の数の変化があることが示され、今後の英語教育について考察された。英語という言語

を取り巻く環境の変化も複雑になりつつある中、英語を媒介とした英語教育は多岐に渡り、その多様性というのは、教授法にも見受けられるように様々である。そこで実際のところ、英語を媒介言語としたプログラムを導入している大学がどの程度世界の大学に存在しているのかということの本講演の後半では具体的な数値を示しながら概観し、その中で、講演者が実際にドイツ・タイ・マレーシアの大学を視察した際の様子が報告された。

その事例報告において、ドイツの大学院では、ほぼ全て英語が使用言語であるが、学部レベルでは教授言語として英語を使用する English as a Medium of Instruction（EMI）は、依然10%未満に留まっているということである。タイのEMI化も未解決の課題も多々あることが報告された。マレーシアの場合でもEMI化が推奨された過去を持ちながら、様々な懸案事項があり、一筋縄ではいかないようである。そのような状況でどのような教育が他国でなされているのかが考察できたのは大変貴重な時間であった。最後に日本でEMI化の導入に成功している授業事例も示され、英語を学ぶ多様化している学生に応じた授業を更に考察していくことの必要性を各自再認識し、その上で教育的示唆を与える講演であった。大変短い時間ではあったのだが、英語教育の過去、現在、未来を他国や英語言語使用の状況を踏まえながら改めて考えることができ、大変有意義な時間となった。

(辻りこ・神田外語大学)

### 支部大会報告

支部大会運営委員長

新井巧磨（早稲田大学）

本年度は、青山学院大学青山キャンパスにて第56回国際大会が行われましたので、支部大会は実

施されませんでした。次回の第 11 回関東支部大会開催に向け、動き出したばかりです。国際大会の運営経験を糧に、皆様にご満足頂けるような大会になるよう、引き続き努めてまいります。

### 支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長  
伊東弥香（東海大学）

紀要編集委員会では、2013 年度より「関東支部紀要 (*JACET-KANTO Journal*)」を年 1 回発行しています。本年度は第 5 号です (2018 年 3 月発行予定)。例年通り、7 月 20 日に応募原稿を締切り、査読者の選定を経て第 1 次審査 (8 月～9 月) が進行中です。投稿者にとって 7 月 20 日は学期中の忙しい最中ではありますが、査読者に大学の夏期休業期間中に審査の時間を十分取っていただくことが必要だという判断に基づいています。また、他学会の論文募集締切日と重なっていないことも 7 月 20 日に設定している理由です。今後、年内に審査 (10 月～12 月) を終了し、採択論文の編集・校正作業 (1 月～2 月) が続きます。

第 5 号の原稿募集にあたっては、2 つの新しい試みに挑戦しました。

(1) 日本語テンプレートと英語テンプレートの改訂 (6 月)

第 4 号と同様、6 月に支部ウェブサイトにて *JACET-KANTO Journal* Vol.5 Call for Papers (<http://www.jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>) をアップし、紀要投稿のための詳細情報を公開しました (論文種別、審査評価項目、紀要で扱う主な専門分野、スケジュール、投稿規程、日本語テンプレート、英語テンプレート)。その際には、APA (6th edition) に準拠した改訂版テンプレートを使用しましたが、投稿規程の記述だけでは多少分かりづらかったルールを具体的

に示すように様々な工夫を凝らしました。投稿者には使い勝手の良いテンプレートになったと思います。

(2) 査読システムのオンライン化 (7 月)

支部紀要の大きな特徴として、「査読システム (peer review system)」を用いて査読者の事前登録を行い、応募原稿の分野や内容に最も適した査読者を迅速かつ効率的に選定する仕組みを確立している点をあげることができます。登録依頼の際には、当該年度の予定スケジュールをお知らせした上で、査読可能性の有無を事前に確認させていただいていますが、本年度はこの作業をオンライン化しました。委員会からメールをお送りし、査読者の候補の方々に URL 上のサーベイに回答いただくようお願いしましたが、回答手順が非常に簡単であったという声もいただき、また、委員会にとっても回答集計と管理が楽になったので、双方にとってメリットのある改善となりました。

紀要編集委員会メンバー: 伊東弥香 (委員長)、今井光子、大野秀樹、奥切恵、長田恵理、小田眞幸 (副委員長)、熊澤孝昭、鈴木健太郎、武田礼子、多田豪、濱田彰、古家貴雄、Chad Godfrey、Paul McBride (敬称略, 50 音順)

### 事務局だより

支部事務局幹事

高木亜希子 (青山学院大学)

### ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会及び月例研究会開催のお知らせ■

下記のとおり、共催講演会及び月例研究会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部 HP、支部会員 ML でお知らせいたします。

(1) 2017 年度第 4 回共催講演会



日時：2017年12月9日（土）16:00-17:30  
場所：青山学院大学総研ビル（14号館）9階第  
16会議室  
題目：「自己表現力育成のための英語ライティング  
指導：英語俳句を用いての実証研究」  
講師：飯田敦史（群馬大学）

（2）2017年度後期の開催予定

2017年度 JACET 関東支部月例研究会（11月）

日時：2017年11月11日（土）16:00-17:30

2017年度第4回共催講演会

日時：2017年12月9日（土）16:00-17:30

2017年度第5回共催講演会

日時：2018年1月20日（土）16:00-17:30

■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀要を確実にお届けするために、転居の際には、JACET 本部事務局へ住所変更届けを提出してくださいませよう、どうぞよろしく願いいたします。

***JACET-Kanto Newsletter* 第9号**

発行日：2017年10月31日

発行者：JACET 関東支部（支部長 木村松雄）

編集者：佐野富士子、下山幸成

斎藤早苗、川口恵子

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学文学部英米文学科

木村 松雄 研究室内